



学校の概要

本校は、今年十一月に開校二十周年記念式典を迎える。前身の北海道富良野工業高等学校、北海道富良野農業高等学校、北海道富良野高等学校商業科が統合し、平成十一年四月に「北海道富良野緑峰高等学校」として開校した。

本校の最も特徴的なこととして、異なる三大学科「農業」、「工業」、「商業」を持つことが挙げられる。また、学科は四つあり、園芸科学科、電気システム科、流通経済科、情報ビジネス科がそれぞれ一間口を持つ、四間口の併置校である。

一方、令和二年度からは、商業科の二学科である流通経済科と情報ビジネス科が統合し、総合ビジネス科となり、来年度からは三学

科での新たな体制でスタートを切ることになっている。

地域概要

本校が所在する富良野市は、富良野盆地の中心都市であり、人口約二万一千人の農業と観光が主産業のまちである。

北海道の中心、上川管内の南部に位置しており、昼夜の寒暖の差が激しい気候と肥沃な大地であることから、おいしい農畜産物が豊富に採れる地域として、農業が盛んに行われている。

現況

全校生徒は、二八六人で、そのうち園芸科学科は七六名となっている（四月一日現在）。生徒は、富良野市内だけでなく、南は占冠村、北は美瑛町から通学している。保護者の職業が農業である生徒の割合は、全校生徒の約二割である。園芸科学科では、

これまで六〇三名の卒業生を輩出し、地域農業の担い手を育成する役割を果たしてきた。

園芸科学科の教育内容

(一) 学科教育目標

園芸作物の栽培・流通・利用及び生産物の加工に関する知識と技術を習得させ、フードシステムの高度化を図る能力と態度を育成する。また、体験的・探究的な学習、地域に根ざした教育活動を通して、職業人として必要な資質・職業観を高める。

(二) 重点目標

- ① 実践的・体験的・探究的な学習を通して、実践力と自己教育力を高める。
- ② 地域に根ざした教育活動を進め、開かれた学科教育を展開する。

- ③ キャリア教育の研究と推進。
- ④ 学科教育の評価と検証。
- ⑤ 学校農業クラブ活動の推進。

(三) カリキュラム

園芸科学科の教育課程表は、表1のとおりとなっている。三年次の選択科目は、グリーンライフ、園芸デザイン（学校設定科目）、フードデザインから一科目を選択し、一・二年次の学習をさらに深める科目選択ができるようになっている。

また、今年度からは、一年次の総合実習を二単位から三単位にし、一単位増加分を、危険物取扱者や日本農業技術検定三級などの農業に必要な資格取得の時間として設定した。

このように、生徒にとっては、富良野地域で主要な農業スタイルを学ぶことができるとともに、六次産業化にも対応し、生産

表1 園芸科学科 教育課程表 抜粋

教科	科目	標準 単位数	1年	2年	3年
農 業	農 業 と 環 境	3～6	4		
	課 題 研 究	2～6			4
	総 合 実 習	4～8	3	2	
	農 業 情 報 処 理	4～6	2	2	
	野 菜	4～8		2	2
	草 花	4～8		2	2
	農 業 経 営	4～6		2	2
	食 品 製 造	4～8	2	2	
学校設定 (農 業)	グリーンライフ	2～6			▲2
	園 芸 デ ザ イ ン	2			▲2
家 庭	家 庭 基 礎	2		2	
	フーデデザイン	2～8			▲2

物の加工・流通についても学ぶことができるようになっている。

(四) 特徴的な教育活動

① プロジェクト専攻班

本校には、畑作園芸班、施設野菜班、草花班、食品加工班、カレンジャー班の五つ

の専攻班がある。一年次の総合実習（二月初旬から各専攻班活動）、二年次の総合実習、三年次の課題研究がそれにあたる。

五つの分野で、生徒が主体的・能動的に地域の課題を分析し、課題解決のための実践活動を行い、結果を分析し、次年度の活動に生かす取り組みを行っている。現在、実践している研究活動を次に示す。

〈畑作園芸班〉

富良野地域の新たな作目として、「サツマイモ」に関する研究を実践している。新たな作目として地域農家に普及させるため、品種による栽培管理に関する研究や地元菓子店と連携したサツマイモ商品の開発にも着手している。

〈施設野菜班〉

富良野地域の主要な作物の一つであるメロンに関する研究を実践している。特に、メロンの二期作にチャレンジし、二期作メロンの栽培管理方法の研究や出荷時期をず



メロンの糖度調査の様子

らした高付加価値化に挑み、今年度は地元菓子店と連携した商品開発にも着手した。

〈草花班〉

生徒がアレンジした草花のプランターを活用し、富良野駅前や市内各施設に彩りを創造する活動を行うとともに、農業高校生ガーデニング甲子園へも出場し、ガーデニング技術を磨いている。また、花を通して、高齢者との交流を図る農福連携も実践している。

〈食品加工班〉

富良野の特産品であるワインを製造する過程で出る、ワインの絞りかす（パミス）



プランターへの定植の様子

の特産品としての可能性を探る研究を実践している。特に、パミスから酵母を取り出し、加工品に活用する研究や、パンや焼き菓子などの製品開発を行っている。

〈カレンジャー班〉

富良野の農産物を活用したご当地グルメ「富良野オムカレー」のPR活動や食育活動、企業と連携した商品開発、地域貢献活動などを実践している。平成一六年に初代が任命され、今年度で一五代目が活動を展開中である。



オムカレー試食会の様子

② 六次産業化に対応した教育活動

〈二次産業の面〉

現在、園芸科学科としては、一次産業の分野を大切にしたいと考えている。一年次の「農業と環境」・「総合実習」で、農業の基礎知識と技術を学び、二・三年次では、「野菜」・「草花」で栽培面の知識と技術を学ぶことができる。農業経営では、地域の農業概要、農業簿記、J A、マーケティング



カボチャ収穫の様子

グについてなど、農業経営者として必要な資質を身に付けることができる。

〈二次産業の面〉

一・二年次に食品製造の授業を設定している。一年次では、食品の基礎知識と技術の習得に努め、圃場で生産された農産物の加工に特化して学習をすすめることができる。二年次では、食品の衛生面や加工・流通に関する知識や技術面の学習を深めることができる。さらに、調理系の道に進みたい生徒にとっては、三年次にフードデザイン

ンを選択できるようになっており、家庭科や食品製造での学びをさらに深めることができる。

〈三次産業の面〉

生徒たちが生産した農産物などの実習生産物を生徒たちが地域住民の方々に販売する機会を設けている。主な機会は次のとおりである。

五月…花壇苗・野菜苗販売実習会

七月…学校祭での農産物販売

九月…カボチャ等収穫物の訪問販売

十月…食彩フェアへの参加

地域イベントでの農産物販売会

商業科販売実習会への協力

十二月…鉢花販売会

生徒自らが栽培管理し、収穫調製を行い、販売することは、生徒にとっては充実感が感じられる学習となっている。また、地域住民との対話を通して、生徒にとってはコミュニケーション能力の向上、学校にとつ



花壇苗・野菜苗販売実習会の様子



ジャガイモの定植の様子

〈市内幼稚園との連携学習〉

本校園芸科学科二年生と富良野市内私立幼稚園とのジャガイモ栽培を通じた交流学習を行っている。定植・花の観察・収穫を行い、最後にカレー作り交流を行っている。

〈JA青年部・扇山小学校との連携〉

カレンジャー班では、JAふらの青年部と連携して、扇山小学校との食育交流学習を実施している。カレンジャー班の関わりとしては、収穫体験への協力、カレー作り交流での調理指導を担う。

③ 地域教育機関との連携学習

〈富良野小学校との連携学習〉

本校園芸科学科三年生と富良野小学校三年生とのタマネギ栽培を通じた交流学習を行っている。定植・管理・収穫を行い、最後はカレー作り交流を行っている。

④ 学科間連携

学科集合型の専門高校としての特色を生かすため、学科間連携の充実も図りはじめ

ている。例えば、

- 商業科が作成する農産物出荷時のラベルシールを活用する。

- これまで学科ごとの実施であった課題研究発表会を合同で実施することにより、他学科の良い部分を吸収して実施できる。今後、これまでの常識にとらわれず、学科集合型のメリットを最大限に生かし、園芸科学科の教育をより充実したものにしていきたい。

⑤ 農業特別専攻科（以下、専攻科）

本校には専攻科も設置されており、現在一年生八名、二年生七名が在籍している。専攻科は、農業経営に携わっているまたは今後携わることが決まっている社会人が、学校だけでなく自己の農場を学びの場として、農業のより高度で、実践的・専門的な知識および技術を学ぶことができる。園芸科学科としては、専攻科職員による特別授

業での連携、土壌分析などでの連携を行っている。

課題

園芸科学科としての課題として、次のことが挙げられる。

- 生徒人数の減少
 - 学科間連携の強化による教育の充実
 - 資格取得率の向上
 - 専攻科との連携強化による深い学び
 - 農業クラブ活動に対する指導の充実
- 教員側としては、これら諸課題を解決し、生徒に対する教育の質の確保・向上を目指す必要があると考える。

まとめ

まだまだ、改善できる部分はあると考えられるが、これら本校園芸科学科の教育活動を通して、生徒は、フードシステムを体験的・探究的に学ぶことによって、職業人

として必要な知識や職業観を育むことができる。

ただ、園芸科学科の進学・就職先一覧（表2）を見てもわかるとおり、必ずしも農業に直接携わる人材として進路を選択している生徒が多い訳ではない。

表2 平成30年度卒業生の進路

進学先一覧	
園芸科学科	<大学・短大> 創価大学・国学院短期大学・帯広大谷短期大学
	<専門学校・他> 北海道立農業大学校・旭川福祉専門学校・経専調理製菓専門学校・ 旭川歯科専門学校・大阪ECO動物海洋専門学校・ 吉田学園動物看護専門学校・富良野緑峰高校農業特別専攻科
就職先一覧	
園芸科学科	(市内) 介護老人保健施設ふらの
	(管内) ムサシ電子・南富良野大乗会・SSVR(彩香の里) 北海道システム通信(au)
	(道内) 山崎製パン・ケイシイシイ(ルタオ千歳工場)・ありんこ・ 北日本精機・砂川市地域交流センターゆう・自衛隊

しかし、農業クラブのアンケート調査によると、農業への理解を示し、農業が好き
な生徒が、九〇%以上もいることがわかっている。このことは、園芸科学科の学びを通し、農業に対する理解と愛情が芽生えている生徒が多い証拠である。

農業の直接の担い手を育成することが第一目標ではあるが、目的を見出せないまま園芸科学科を選択して入学してくる生徒も少なくない。そのため、農業人だけでなく農業関連産業人の育成を図ることも重要な目標の一つである。

本校園芸科学科の学びを通して、巣立った卒業生たちが、北海道の農業を担い、見守り、助け、さらに発展させていく人材になると信じている。

： ：

※執筆・写真提供は、教諭 杉田慎二先生
にご担当頂きました。